「復興に向けた音楽の贈り物（吹奏楽部）」　宮城県仙台東高等学校

１．活動の概要

恒例の南三陸町での春季合宿を２週間後に控え，定期演奏会まで約２ヶ月という時期，大震災に見舞われた。

合宿予定地は津波で被災し，定期演奏会を予定していたホールは使用不能，再開見通しは不明。定期演奏会は３年生にとって部活動生活の総決算でもあるのだが，やむを得ず中止を決定した。この時点で活動の目標がまったくなくなり，特に３年生にとっては大きな無力感を味わうことになってしまった。

本校は幸いなことに津波の被害は免れたが，校舎が大きな損傷を受け，４月中旬まではまったく何もできない状況となった。しかし楽器の損害は思ったほど多くはなかったので，５月からはなんとか活動を再開できた。

定期演奏会ができなくなり，今自分たちで何ができるかを３年生が中心となって考えはじめたとき，毎年合宿で訪れていた南三陸町の方々が鳴子温泉の方に一時避難をしていることがわかった。そして，自分たちの音楽の力でその方々を元気づけられないか，被災地の高校生として自分たちも少しでも復興に関わりたい，そして自分たちも少しずつ前進したいという気持ちが芽生えはじめた。

同じようなことを考えている知人がいたため相談を持ちかけながら，他の団体にも参加を呼びかけ，６月２５日，鳴子スポーツセンターを会場として「“音楽の贈り物コンサー” in 鳴子～吹奏楽で歌いませんか，元気みつけませんか～」を開催するに至った。

本番は各団体の単独演奏の後，参加者全員(約120名)による大合奏で締めくくった。本校は定期演奏会のために準備していたマーチングの演技の披露，そしてヒット曲にのせたダンス，落ち着いたバラードや元気がわくような曲をちりばめたステージを披露し，定期演奏会に蓄えていたパワーを存分に発揮できたようである。当日の観客にもその思いは伝わったようで，アンケートにも以下に紹介するようなうれしい言葉がたくさん見られた。

「すべて良かったです。辛いときに元気をありがとう。皆さんもこれから苦難がたくさんあると思います。どうか負けないでくださいね。2011.6.25この日も忘れません。最初から最後まで感動の涙を流していました。」(60代女性)

「一人一人の音が，一人一人のあたたかい心に聞こえてきました。思いやる心があれば必ず伝わるものですね。鳴子に来て下さりありがとうございます。明日からまた頑張れそうです。」(40代女性)

鳴子スポーツセンターでのマーチング演技

２．活動の成果等

その後も日常の活動が思うように進まない場面が続いたが，被災地にある高校として，「地元の復興」という言葉は１年を通じて生徒たちに大きなウエイトをしめたようだ。そして，秋には「元気！六郷復興の集い」「沖野地区市民まつり」「若林区童謡フェスティバル」，冬には「SENDAI 光のページェントのパレード」，鳴子の演奏会の地元版ともなる「“音楽の贈り物コンサート” in 若林」など，地元のイベントには可能な限り参加してきた。

やがて地元のホールも再開し，今は，昨年中止となった定期演奏会の再開にむけて準備を進めている。この定期演奏会を無事復活させることが自分たちの活動の「復興」の１つの区切りだという気持ちが強くなっている。

「元気！六郷復興の集い」での演奏